

インドシナ旅日記

大分市はキリシタン南蛮文化の都市です。南蛮というと我々はいづれ蛇腹のような白い襟の服を着たポルトガル人やオランダ人を連想してしまいます。しかし本来、南蛮とは中国の古い言葉であり、中華（中国文明の中心＝漢民族）に対する辺境に住む文明開化していない人々ということで、東の東夷から北狄、西戎、南蛮と呼んでいました。古代中国の世界観にはなかったヨーロッパの人々はその埒外であり、もし当てはめるとしたら西戎の方がより正確なはずで

ではどこが南蛮の地かというところ雲南省からインドシナ半島辺りです。そこを中継基地としてそこからやってきたからこそ、ヨーロッパ人を南蛮人と呼んでいたのでしょう。その南蛮の地であるインドシナに、東夷の地の倭人の末裔が旅をして何を感じてきたかをお話ししたいと思います。

4. 遙かないアンコールワット

一ノ瀬泰三が亡くなって今年で45年になります。1978年に出版された一ノ瀬泰造写真・書簡集『地雷を踏んだらサヨウナラ』が1999年に映画化されたのを見て以来、わたしはいつか彼が目指したアンコールワットを訪れようと心に決めていました。もともと、小学生時代にジャングルに覆われた遺跡の神秘さに魅せられていたのですが、一ノ瀬泰三には別の意味でシンパシーを感じたのです。



一ノ瀬泰三の遺作

彼はアンコールワットを写真に収めることができたら死んでもいいとまで言っています。ではなぜそこまでアンコールワットに拘るのかと聞かれても、おそらく彼には答えることはできなかつたでしょう。曰く「破壊される前に記録として残したかった」曰く「スクープ写真として高く売れる」

仮に彼自身がそんなことを言ったとしても、それは正確ではないとわたしは思います。わたしには彼の気持ちが分かるのです。

それはわたしも彼と同年配の時、「アマゾン河」に行きたいと思い、そのためにのみ青春を費やしたという経験があるからです。ではわたしがどうしてアマゾンに行きたかったかと問われれば、明確な理由を見つけることはできません。もちろん後からいくつでも理由はつけら



一ノ瀬泰三が処刑され遺棄されていたプラダック村は今では長閑な田園風景を取り戻しています。

れます。しかし結局のところ「そこにアマゾンがあったから」それだけなのです。

アンコールワットはわたしより4つ年上の戦争カメラマン一ノ瀬泰三が、命を賭して自分の目で見ようとし、そこまで1.5キロの地点で行方不明となり、9年後に処刑された姿で発見されることになった場所です。わたしにとってのアマゾン河と同じように、彼にとってのアンコールワットはただの遺跡ではなかったでしょう。なかったでしょうが、他の誰にとっても理解しがたい、今となっては観光地として以外何の意味も持たない目的地でしかないのです。

従軍カメラマンだった彼を捕え処刑したのはクメール・ルージュです。クメール・ルージュ(赤いクメール)はかつて存在したカンボジアの政治勢力、武装組織で当時のカンボジア政府への抵抗を行っていた勢力の総称です。やがてポル・ポトの台頭とともに他勢力や諸政党を粛清し、内戦状態を経てポル・ポト派と同義語になりました。1978年当時、クメール・ルージュはアンコールワットを基地としていて、そのため政府軍やそれを支援していた米軍の砲撃や爆撃にさらされていました、遺跡に何の価値も見出さない彼らによっても破壊されつつありました。

アンコールワットに向かう主要街道ではアンコールワットから約1.5キロメートルのところが前線となっていて、一ノ瀬はそこを何度も突破しようとしたり、迂回してジャングルからアンコールワットに近づこうとしていたようです。



泰三も食べていたカンボジアの主食であるコメは、中粒種で日本のお米よりも細いのですが、わたしには美味しく感じました。



プラダック村近くの街道沿いの青空市場は生活物資を取り揃えてにぎやかでした。



一ノ瀬泰三もこんな民家に身を寄せていたはずです。

一度はクメール・ルージュ側に発見され捕えられましたが釈放されています。それでもあきらめずに潜入を試み、二度目は命を落とすことになりました。もちろん世界遺産アンコールワットはそれだけで素晴らしいのですが、わたしの遠景にも緻密なレリーフにも、一ノ瀬泰三の情念のようなものが二重写しに見えて仕方ありませんでした。